

アイドルをビーチシートで
待つ悪夢



園田大造

始めに

例の如くにご挨拶申し上げます。作者の園田大造です。この度は拙作をお買いただき、お礼申し上げますが、この作品には残虐な表現が含まれている、というかしらごさいません。苦手な方は今からでも遅くはありませんので、どうか思い止まってください。

東南アジアあたりにある。とあるビーチリゾートのお話です。そのビーチリゾートを裏でを仕切っているマフィアのボスが、とある日本の美人アイドルに目をつけて、そのマネージャーと結託して、写真撮影にやつてきたそのアイドルを拉致とて、変態サデイストのリゾートの客を対象とした秘密のショーでその国の大統領一家まで巻き込んで、それこそ好き放題にやりつくした挙句に、料理をして宴会で食べてしまおうと言うとんでもないお話です。

ともあれ楽しんでいただければ、作者としてこれに勝る喜びはありません。

作者敬白

一、魔獄の島 2P 十三、今度は徹底的にぶ※と 184P

二、アイドルだから裸にするのも 7P 十四、大統領の居ぬ間に 199P

三、アイドルを鞭打つ 25P 十五、拳句の果てに宣告する 202P

四、拷問はまずコウノトリ 44P 十六、まずは有刺鉄線で縛って 204P

五、拷問はさらに続く 61P 十七、大流腸して手足を砕く 222P

六、例によって屈服しても無意味 78P 十八、いよいよ罠り殺しに 241P

七、じっくりと言ひ聞かせる 96P 十九、蟻を浴びせて手足も 258P

八、そんな有様だから食るのも 99P 二十、アイドル釜茹で 276P

九、色々鍛えてみる 116P 二十一、切断して料理して 294P

十、今度は奴隷として 134P

十一、奴隷だから奴隷らしい姿に 151P

十二、ポニ※に檻 167P

一、魔獄の島

メシクワネバ島は東南アジアのどこかにあるリゾートアイランドで、風光明媚な島で知られているし高級リゾートと言う事で世界的に通用している。なるほど立ち並んでいるリゾートホテルはし中々に高級なものがそろっているし、メインストリートにはお洒落なカフェやレストランとともにブランドショップや高級ブティックなどが立ち並んでいて、また美しい海を生かしたマリンスポーツなども盛んだし、当然カジノなどもあってあらゆる層のあらゆる歓楽に対応して中々に繁盛している。ただし東南アジアにありがちなのだが、あらゆる歓楽に対応していれば当然風俗的なものも揃っていてこそかんぜんというものでから、高級感が漂って何とも瀟洒なメインストリートだって一本裏に回っていれば何をやっているのか分からないのが実態で、中にはレストランからそのまま直行できるものも数多く、海岸に面して全室オーシャンビューのコンドミニアム形式の高級ホテルでさえ、そちらの方の歓楽だってちゃんと提供されるし、燕尾服に身を固めてフロントに畏まっているコンシェルジュもそちらの方もちゃんと心得ているとなると、もっとディープでコアでマニアックで、非合法的な楽しみだってちゃんと用意もされようというものだ。そして非合法的な歓楽とくればそんなものに警察など関与できる訳がないから、仕切る組織が必要にもなるうというもので、表向きは観光案内や酒場の経営をやっているのもっともらしい企業名をつけているが、誰もそんな名前前で呼ばなくて専らメシクワネバ・マフィアと呼ばれる、裏ではもっと過激でおぞましい歓楽の提供を洒落にならない価格で提供しているし、利権を守るためには人殺しも平気とする組織がきっちり存在しているし、住民たちは警察より専らこちらを頼りにしている。

そしてやはりこんな地域ではありがちなのだが、このメシクワネバ島を統治する国家は長年軍部と結託した独裁政権、まあ大体独裁政権は軍部と結託しているものだが、に支配されていて、独裁政権なんて長期化すればするだけ様々な利権と結びついて腐敗するものだから、その国の政権もその例にもれず腐敗しまくっている。そして当然の事ながらこのメシクワネバ・マフィアもこの政権としっかり結びついて結託しているのは公然の秘密になっってしまったというほどで、何しろこの国の大統領がお忍びで自身のおぞましい性癖を満たすためにこの島に定期的にやってくるとさえ噂されるほどののだ。そして何しろ政権とこんな関係になってしまえばもう怖いものなしだし、さらにはここまで来たならば本来なら治安的には相当やばいはずなのだが、ヤクザ同士の抗争だって起こりようもないし、メシクワネバ・マフィアが非合法的なものを独占すれば没義道な事もむしろできなくなり、皮肉にも治安はむしろ良くなって住民たちもいよいよ頼りにされるようになっていく。

そしてそのメシクワネバ・マフィアの事務所を訪ねた日本人は、一見すればさわやかな優男風といった処だろうが、しかし今はその本性なのか、何とも言えないおぞましさをむき出しにしている。そして事前にアポをとっていたとみえて社長というよりもやつぱりマフィアのボスというべきだろうが、五十余りで頭は禿げ上がって赤ら顔でデブの小男で、つまりはどこをどうとつても狒々親父以外の何物でもないウロシンケ・キズスの部屋へと通される。といいかにも東南アジアらしい適度な雑然さが心地よいと言えば心地よいその部屋には、どうやら秘書らしいハツとするほどに美しいがどこかオカマっぽいイボンヌ・タウンゼントやボディガードも兼ねている巨漢で怪力そうなのはともかく見るからに凶悪無

残なゾルバにゲルバなどが揃ってこの男を待ち構えている。そして促されるままに長椅子にそんなウロシンケたちと向かい合うように腰を下ろしたその男はいかにも面白そうに、「それにしても英川奈保子に目を付けられるとはお目が高い。もちろん可愛いし若々しい美人だし、もちろん性格だって申し分ない。そして何より清楚で健康的な色香に溢れた姿態と、美しく可憐なのはもちろんどこかあだけなさを残してロリっぽいとさえいえる、私はそれとは少し違うと思っていますのですが、あの美貌とのアンバランスさがまた堪らない。まさしく極上のアイドルですからね。そう私は英川奈保子のマネージャーをしている白銀水戸太郎と申します。」

と話しかけてきて、とウロシンケもおさら一層面白そうだ。

「いやいや、それはこんな素敵なお嬢さんでもあり、この国でも大変な人気者ですし、この島には手間と暇を持て余して刺激に飢えている大金持ちがこの国ばかりか世界から我も我もとやってきている。そこに彼女が思うが儘に苛みぬいて辱め抜いてさらに一層過激なことができるとなれば、マゾとのなれ合いプレイでは満足できないサディストたちも数多いですから、そんなものだって彼女の魅力にはその目を奪われるし、それを目当てにここにやってくるものだって期待できる。いや、彼女にはこの島の景気がかかっていると言っても過言ではないのですからな。」

そしてそんな狒々親父には似合わないほどに悠然とそんな事を話していたが、急に声を潜めるなり、

「実を言えばこの国の衛星大統領たるネガエッタラ・バル balan 大統領も実はこの英川奈保子にぞっこんでしてな。大統領の側近から何とかできないかと内密に相談が来ているのです。もし引き受けていただけると大変うれし、御社には十分すぎるほどの報酬もお支払するし、この国において様々な便宜を図ることをお約束できる。いかがですか、お引き受けいただけるかな。」

と話しかけてくる。しかしその水戸太郎と使用する男はいよいよ面白そうだし悠然としたものだ。

「もちろんお断りいたしますし、こんなやばい話に乗れるわけありませんし、そもそも会社には話してもおりません。」

その悠然とした様子のままになおさら面白そうにそんな事を話していて、さすがにウロシンケたちは一瞬あつけにとられたように顔を見合わせていて、次の瞬間に憤然となろうとする。

ただし本当にこの連中が立ち上がるうとするのを制したのはさすがはウロシンケで、むしろ何を感じ取った様子で水戸太郎にさらに話すように促すと、この男も軽く会釈しておいて話始める。

「何しろいま日本ではコンプライアンスとジェンダーだけで、何かちよつとした違法行為だって企業にとつて命取りになりかねないし、女性の容姿についてさっき話したようなごく客観的と言っても良い様な事でさえ、女性蔑視だ差別だと言う事になって、もちろん企業に所属しているアイドルタレントを一人非合法な組織の生贄にしてくれなどと言われ、それこそ女郎の置屋のようなお宅の国の芸能プロダクションとは違ってそんな話に乗れるわけがありませんから、最初から話もしていないのはむしろ当然というものです、ただし。」

とそこまで言うておいてわざと言葉を切っておいて、さらに目の前の者たちを面白そうに見まわしておいて、

「ただし英川奈保子は毎年一冊ずつ写真集を取っておりまして、その度に海外の風光明媚な場所を撮影場所にしています。そして今年はこのメシクワネバ島を撮影場所にするにといたしました。そして早速来月から撮影に取り掛かることとして、五日よりインペリアルグランドホテルを予約いたしました。あとは名におうメシクワネバ・マフィアの皆様の事ですから、さすがに部屋から拉致するのは乱暴にしる、迎えに赴いたタクシーを入れ替えるなりプライベートで街ブラをしている時にトラップの店に誘い込むなり、何とでもできるではありませんか。」

などと話してきて、もちろん言っていることが理解できないような間抜けがこんなところに一人としていない。

そして見かけはただの狒々親父でも何しろこの島を実質的に支配しているマフィアのボスなのだから、この男が何を望んでいるのかわからぬ訳はない。言い終わったのを見届けるなり、大きくうなずきながらなおさら面白そうに、

「なるほど言っていることは良く分かった。となるとさすがに最初に提示した金をそのままだという訳にはいかぬからその半額をお前のしている口座へと振り込むようにするが、さすがに余りに早すぎれば口座履歴から足がつかぬとも限らない。適当な時期をお前が指定する事だ。それからこれは私の感なのだが、もしかしたらお前は我々の会に参加したいのではないかな。」

などと話してきて、この水戸太郎という男はいくらなんでも話が早すぎるというように頭をかいていたが、しかしすぐに一層面白そうに、そしてその部屋に入ってきた時からの凄愴でおどましい雰囲気をおさら強くしながら、

「やっぱりわかりましたか。というよりも金はもちろん嫌いではないし貰えれば貰えるだけ嬉しいのも事実ならば、半分されて正直むっとしていいるのも事実ですが、それにしてもしばらくは遊んで暮らせるだけの金額であることに違いはなくて、実はこのウロシンケ氏の主催するショーへ奈保子をぜひとも出演させたい。というよりむしろ出演させずにはおられないし、それを見るばかりか参加せずにはおられないのが本音ですから、それをそちらから言っていただけたのはありがたい限りです。」

といかにも鷹揚に話してくる。

「なるほどね、どうもお前には入ってきた時から私たちと同じものを強く感じていたから、案外そうではないかと思っていたのだけれども、やっぱり私たちの目に狂いはなかったという訳だね。それにしても見知らぬものばかりというのもそれはそれで面白けれど信頼していたマネージャーが加われば、それはそれで面白い。」

そして最初から面白そうに社長でありボスであるウロシンケと水戸太郎のやり取りを聞いていたイボンヌがおさら一層面白そうに言う、ボディガードだけではなくて腹心でもあるのだからあの巨漢で怪力で残忍一方と思われたゾルバとゲルバもいよいよ面白そうに、

「そりゃあマネージャーとして目の前にあんな素敵な女の子がうろろうろしていた自分を信じているのだから、それはサディストならばなおさら堪らなくなっけしからぬ妄想のいくつかに起すも無理はないからな。そしてそれが実現できるとなったらなおさらだな。」

「それにしてもよく我々がそんな組織であるということが分かったものだ。あの文書だつてなるほど企業に高度な清廉性が求められる日本の企業の事も配慮してなるべきばかりして受け入れやすくした文書のはずだったのだが。」

などと話してくるから水戸太郎もその顔にいかにもおぞましい、残忍な笑みを浮かべるなり、

「そりゃあ日本の芸能プロダクションだつて一昔前までは御国のそれと大同小異でしたし、今は大企業でも実は発祥は松次郎と竹次郎という兄弟が役者の借金の証文を手に入れたからだつたりする。実際今だつて地域によってはその筋の親分へのあいさつが欠かせないのは斯界の常識だつたりするし、地域の芸能事務所には実際その筋そのままだつたりするから、実はさつきみたいな立派な口など聞けたものではない。ま、『蛇の道は蛇』とでも言いましょうか。」

などと一気にまくし立ててくる。

「それにあんなものが目の前にうろろされていてそれは劣情を催さずにはおれないのはその通りだが、それに加えて十六歳の時から面倒見ていて刻々魅力的になっていくし、特に高校を卒業して大学生になった頃から日に日に女らしくなつてきて、堪らなく魅力的になつていつて、そして毎日それを見せつけられていれば、それはこんな事だつて企てずにはおれなくなつてくる。分かるだろう。」

などと話してくるものだから、そこはサディストならばサディスト同士で響きあうものがあるようで、つい何十分前に会つたばかりなのに何だか請来の知古のようになってしきりにうなずきあつてゐる。そしてそれに力を得たように、

「ところでうちのタレントでまず間違ひなく我々の同類がいて、やはり普段は仲良くしてゐる者がゐるのだが実はこれが陰ではこの奈保子に異様にライバル心を燃やしている、しかしまず間違ひなく二段か三段落ちる女性アイドルがいてこれを巻き込めばいろいろ面白そうだ。ついでにこの国でタレント活動させるといふのはどうだろう。」

というから、他の者は願つたりかなつたりといった顔つきになつてゐる。ただしイボンヌは喜んでばかりはいられない。

「それはそうとそいつは本当に清純派なんだろうね。私たちだつて一応芸能事務所みたいなことをやっているけれど、表面はいかにも清純派つて顔をして実は大変な阿婆擦れつていふのを随分見ている。もちろんこいつはそんなのとは物違ふつていふのは分かるけれど、念には念を入れておかないといざというとき馬鹿を見たらお客様は興ざめだからね。」

急に真顔になるなりそんな事を聞いてきて、ゾルバとゲルバもそれはそうだという顔つきになるし、ウロシンケも興味津々といった顔つきだ。そして水戸太郎もなるほどと言う様にうなずいて、

「その点は大丈夫なのは私が保証していいのは実家は某大企業の執行役員をしていて、幼い頃からしつけは行き届いてアイドルになるのも散々渋つたのを無理やり口説き落としたりし、その分我々にも責任がある以上に実際品行方正な、こんなに可愛いのおよそ驕つた処もないし結構学校の成績も良くてその気になれば国立大学にも行けたのに、芸能活動の事をおもんばかつてそれでも結構よい私立に入学したまじめな女の子です。また結構天真爛漫な処があつて私にも好きな彼のことを相談するくらいで、まあファーストキスくらいはしていてもそれ以上はととてもとても。」

などというものだから、この連中の鬼畜な劣情はいよいよ激しく燃え盛つてくる。

「白銀さん、こんな素敵な部屋を取つていただいてよかったのかしら。写真集の撮影というよりもむしろ本当にリゾートにやつてきたような気分だわ。」

明日のスケジュールの打ち合わせに部屋にやってきたマネージャーの白銀水戸太郎に、英川奈保子はいかにも嬉しそうに、しかし若干申し訳なさそうに話しかけてくる。ただしその部屋はさすがにスウィートまではいかにしても、見るからに高級感が打触れていてベッドには天蓋がついているし、オーシャンビューの窓からはそろそろ夕暮れになりかかっている牒が美しく見えているし、ガラスのテーブルにはトロピカルなフルーツの籠が置かれて、早速一つ失敬したらしくて皮と種が乗っている白の小皿が置かれている。そしてそんな奈保子はなるほど美しく二十歳なのにとことなくあどけない表情を残しているのが何とも可憐で、時々除く八重歯がその可憐さを際立たせているようだし、にっこりと微笑みかけてくる表情にしても何とも素敵画から、国内ばかりか東南アジアでも人気になるのは水戸太郎に良く分かるし、やっぱりいろんな感情がこみあげてくるのはどうする事もできないが、もちろんこの男はそんなものをすべて押し殺す。

「まあ奈保子さんはずいぶん頑張ってくれたから、僕から社長に談判して部屋と食事のグレードを上げて貰ったのだけど、そんなに喜んでもらえて僕も嬉しいな。もともと社長もすんなり応じてくれたから、同じことを考えていたのかもしれない。ともあれ明日十時からビーチでの撮影にかかるからね。」

そしてわざと事務的に言うが奈保子は益々嬉しそうだ。

「わかったわ。それにしても料理もグレードアップってとっても楽しみ。こんな国の料理ってまず日本では食べられないし、多少食べ過ぎたってまさか撮影の間に太る訳はないし、いろんな国に行けていろんなものが食べられるだけで、私タレントになつてとっても良かったと思ってる。白銀さん、本当にありがとう。」

無邪気にこんな言葉をかけられた水戸太郎はちよつとばかりに面食らって、しかし毎度のことだからそんなに慌てる程の事でもない。ただいかにも嬉しそうに、

「ううん、奈保子さんって本当に食べる事が好きなんだね。それに食べてもそんなに太るタイプではないけれども、その体系も奈保子さんの魅力の一つなんだから注意してね。まあ撮影の事についてはいつもきちんとやってるから特に言う事はないけれど、一応モーニングコールは頼んでおいたくれぐれも寝過ぎたりしない様に。」

と言っておいて、にっこりと笑いかけると奈保子もにっこりと笑い返す。もちろん食事を予約しているレストランではウロシンケ・キズズをはじめとするメシクワネバ・マフィアの面々とショーの客たちが一足先に獲物の下見にやってくる事、明日偽の迎えのタクシーがやってきて拉致されることなどももちろん彼女は知る由もない。

その部屋の中央に、奈保子は丁寧にシャンブーとリンスを施されて軽くウェーブさせられたセミロングの髪で天井から吊るされていた。もちろんその姿だけでも無残だったが、手足の断面はきれいに切揃われ皮膚から脂肪、肉、骨格と綺麗に層になっている断面がむき出しになり、その姿をいよいよ無残にしている。そしてこの哀れな日本の清純派アイドルはその半分にされている手足を空中で死に物狂いで足掻かせ悶えさせて、

「いやだあーっ：いやです：お母さん助けて：ギヒキヤアアアッ：アウキヤアアアッ：あひあう：ヒキイイイイイッ：どうしてなの：どうして私こんな目に：ヒキイイイイイッ：ああうっ：死にたくない：お願いご主人様：死ぬのはいやあーっ。」

といよいよ無残な声を振り絞るようして泣き狂って哀願を繰り返して、もちろんその有様はいよいよ哀れで刺激的で、取り囲むウロシンケたちとさすがにここ何日かは顔ぶれが固定されているその客たち、大統領のネガエッタラ・バルバランと妻のマフマフに娘のアイアイ、水戸太郎とアイドル仲間のまなんに成増慶子に上岡菊比古といった揃いも揃った極めつけのサディストたちは劣情と嗜虐心と、更にそれ以上にさらに一層おぞましいものを横溢させていて、ただそれはひたすらたぎらせているばかりで何も言わない事でおさら奈保子を苛んでくる。そしてあのプロレスラーとゲルバが鋭い棘を一面に植えつけた見るからに恐ろしそうな鞭を手にして、もちろん他の者たちにも増しておぞましい笑みを湛えて進み出る。

「なるほど、料理と言うからには味付けをしてやらなければならないと言うことか。これは面白い。しかもそれがこんな可愛らしい女の子となったら：、ひひっ、最初から俺たちをそんなにそらせてどうしようと言うんだ。」

「しかし俺たちがいきなりこんな良い思いをしていいのだろうか。代わりに後から何かひどく悪い事が起こりそうな気がする。」

などと、今にも口笛でも噴出しそうなほどに楽しげな様子で話しかけてくる。ただしこれから処刑されようとしている奈保子は当然それどころではなくて一層無残な声を振り絞って、

「キヒキヤアアアアッ：キヒイイイイイッ：ああうっ：アヒイエエーエッ：ひあう：お願い助けて：誰か：誰か助けて：いやだあーっ：ヒアキイイイイッ：どうして：どうして私殺されるの：いやだ：死ぬのはいやあーっ。」

と泣き狂い泣きじやくって哀願し、そしてその体をさらに激しく無残にのたうち狂って苦悶して、半分の手足はなお無残に掻き回されて豊かでこんなに苛まれても若々しさを失わない乳房が揺れて一番恥ずかしい処もむき出しになり、その様はさらに無残であるのと同じ時に刺激的だし、この純真な娘がこんなにも怯え切っていてさえ、まだなお自分の余りに恐ろしい運命の半分も理解していない事がその姿をなお刺激的にする。

そしてそんな生贄のアイドルのなおさらにその顔におぞましい笑みを浮かべる二人は、早速に二本の棘付きの鞭はそんな美しい娘の肌を滅多打ちに打ちのめし始める。

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

もちろんそんな鞭だからその音はいよいよ激しく響き、その度にその余りに苛み尽くされている肌に無残な条痕が刻まれ、肌が爆発してしまいそうな激痛にその体はいよいよ一層の激しさでのたうつ。

「ギャウギヒイイイーイッ…ヒギヤアアアアッ…アギヤアアアアッ…うああつ…グヒキヤアアアアッ…痛いよーっ…許して下さい…痛い…痛い…ぐあお…ギキイエエーエッ…お願い助けて…こんな事いやだ…いやあーっ。」

もちろんその泣き狂い泣き叫ぶ声は一際無残で凄絶で、その有様は当然無残で、特に半分になっている手足がのたうつ様がその姿をさらに哀れで刺激的にする。

そしてその二人はその余りに無残に様に言葉が発する間も勿体ないとばかりに、ひたすら手にしている鞭を振るい続け、もちろんそんな有様で苛まれる奈保子の責め苦はなおさらに凄絶だ。

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ギウヒギヤアアアアッ…あおが…ギヒキイイイーイッ…グギヤキヤアアアアッ…アギヒイイイーイッ…ぐあうっ…お願い許して…痛い…死にたくない…グアギキイイイーイッ…お願い殺さないで…痛いよーっ。」

もちろん鞭の音に交錯する奈保子の絶叫と哀願する声は一層無残で刺激的にその部屋に響いていて、鞭打っている二人も見ているウロシンケやネガエッタたちも大いに喜ばせそそれ、その嗜虐心や劣情、そのほかもろもろの感情をなおさらに煽ってくる。

「ふふふ、泣き狂うのはいいがこんなものはまだ下準備じゃないか。今からこんなことで一体どうする。と言っても一体今日どんなことになるのか知らないのにそんな事を言ってもそもそも無理か。」

「それに今からこれだからこそ本番はもっと期待できるという考え方だつてあるからな。」

「つて言うよりそろそろ自分がどうなるのか教えてやっても良いのでは。」

「いやいや鞭打っている最中だぜ。今はこの鞭打ちに集中してやらねばアイドルの奈保子があんまり可哀相だ。」

などと話していて、鞭はいよいよ一層の激しさで浴びせられていて、奈保子の苦悶と絶叫はいよいよ凄絶だ。

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

「ピュッシイイイーイッ！」

．．．
ようやく棘付きの鞭による鞭打ちはやみ、奈保子は若々しくてちよつと豊かな、可憐な顔立ちとアンマッチな処がまた堪らないだけ無残な事になっている、そしてまだまだ無残な事にならない体で新たな条痕と溢れる鮮血に血まみれになってしまつてぐつたりとぶら下げてしまつていた。そしていよいよ無残な声を振り絞るようにして、

「ぐあうひ：グギヒキイイイイッ：ヒイイイイッ：お願い助けて：痛いよう：痛いっ：あぎうっ：ヒウギイイイイッ：お願い許して：殺さないで：グギイエエーエッ：ひぐひっ：ご主人様助けて：奈保子を助けて：死にたくない：死ぬのはいやあーっ。」

といよいよ哀れに訴えていて、見ている者たちは当然何とも面白そうだ。何だかだと言つても首魁のウロシンケがそんな奈保子の姿に満足そうな笑みを浮かべ、

「ふふふ、奈保子さんはもちろん殺されてしまうのだが、何しろここは世界でも有数のビーチリゾートで様々な飲食店も名を連ね、世界に名の知れた店も結構ある。ただ殺してしまうだけなどと芸がないから、ひふふっ、ひひっ、いつその事料理してみんなで食べてやろうと言う事になったんだ。もつとも私も大統領閣下も奈保子を最初に見た時からいかにも美味しそうと思つていたから、こうして拉致するのとどちらが先かと言えばいささか怪しいものだが、そんな事など大した問題ではないからな。」

などと話している間に、その体の下に配下の者たちが少し赤っぽい液体に満たされている巨大なガラスの水槽が運ばれてくるから、さっきの言葉だけでも信じられない奈保子の目は信じられないように見開かれる。

そしてそんな奈保子の様子にその部屋の雰囲気がおさら激しく鬼畜に盛り上がるを気持ちよく感じながら、ウロシンケがいよいよ面白くて堪らないといった様子で、

「ただし美味しく料理されるには、もうちよつと派手に泣いたり喚いたり悶えたりして貰わなければならない。」

と声をかけたその次の瞬間、その言葉が信じられない様にその可憐な目を見開くばかりの彼女を吊つていたロープが一気に緩められて、そしてその次の瞬間、激しい水音と水飛沫とともにその体は一気に水槽の中へと沈められてしまう。しかし奈保子はやっぱり大きくその眼を見開いて、しばらくその唇を激しく戦慄かせようやく、

「グギヤヒキヤアアアアッ：ああうっ：ぐあうう：痛いっ：ここから：ここから出して：痛いわ：痛いよう：グギヤギイエエーエッ：グウキヤアアアッ：ヒギヤアアアッ：うあおっ：ヒギギイイイイッ：お願い助けて：お願い出してえーっ。」

と一層無残な声を張り上げて泣き狂い絶叫したかと思うと、その水槽の中の体をまさに狂つたような激しさでのうち狂わせ始め、その切断されてしまつている手足が水槽のガラスを激しく叩くが、それもその姿をさらに一層無残に刺激的にするだけの事だ。そして取り囲んでいる人間の顔をした悪魔たちの中から進み出たのは二人の東洋人の壮年のやせでのつばとでぶでちびの若者二人で、いかにもシェフらしく白の制服に高い筒型の帽子をかぶっている。そして当然二人とも何とも面白そうだ。

「ふふふ、今日の奈保子の処刑は我々二人で担当することになる。何しろ私たちは世界一の女料理人といわれているくらいなのだから、うんと期待してもらつていい。」

まずやせでのつぽがそんな事を言い、もちろんただ殺されるだけでも余りあるのにいよいよ食べられるとなつた奈保子の恐怖、汚辱感、おぞましさは氣も狂わんばかりだし、全身を苛む激痛がそれをさらに残酷なものにする。

「ああうっ：ああっ：アキヒキイイイイッ：ヒイイイイッ：ご主人様助けて：お願い：お願いだから：アキヒイエエーエッ：死にたくない：お願い殺さないで：お願いご主人様：ひあうっ：何でもするから助けて：死ぬのはいやあーっ。」

さらに奈保子の苦悶と絶叫は一層凄まじいが今度はちびでデブの若者の番だ。もちろんその顔にはやせでのつぽニ※も劣らずおぞましい笑みを浮かべてしゃべり始める。

「ふふふ、我々はウロシンケ様付きのコックで果たしてご主人様と言えるのかな。ま、ゾルバとゲルバもご主人様ならこだわることはないが、人が話している時はちゃんと静かに聴くものだ。ひふふ、躰けの良くない食材だな。」

そしてそのいかにも面白そうな言うがその言葉にも奈保子の相変わらず激しくほとばしる泣き狂う声が交錯し、二人のシェフはそれにかまわず、むしろいよいよ面白そうなので、そして残忍な興奮にぎらつくような目をして話しかけてくる。

「それに聞かせたいのはここらだけれど、そもそも男の我々が世界一の女料理人というのは明らかに変だと思わないかね。としたら世界一の女料理人って何のことだとは思わないかい。」

「ふふふ、そりゃあ奈保子みたいなお嬢さんにはそれは分からないだろう。つまりは我々は女の子を食材として料理することにかけては世界一という意味なんだ。ふふふ、ふふ、奈保子、聞いているか。我々は奈保子さんみたいな若くて可愛くて心だつてきれいな女の子を料理することについてはまさしく世界一なんだ。ふふふ、少しはびっくりしたかな。」

この二人の料理人はなおさら面白そうになおさらにたぎった様子で話しかけてくるが、しかし奈保子は無残に泣き狂いながらもその言葉をなすすべなく聞いていて、そしてその体は相変わらず激しくのたうち狂っていて、サディストたちをなおさら喜ばせていて、そして二人はなおさら面白そうだ。

「もちろん食材が食材だし何より我々はサディストだからな。ただできあがつた料理が美味いというだけじゃない。その途中においてどれだけその食材を泣き狂わせ、のたうち狂わせて、どれだけ魅力的な姿を見せてお客様を喜ばせるかも含まれている。」

「そんな我々に料理されてしまうとは、ひふふ、運が良かったというべきか悪かったというべきか。」

「まああえて言うならばここがどんなビーチリゾートなのかもう少しよく調べるべきだったかな。まあこんな可愛い女の子が食べられるリゾートだなんてどんなガイドブックにだつて載っていないが。」

「あとマナージャーももう少し疑うべきだったかな。」

もうどちらがちびでのつぽか、やせででぶなのかもどうでもよくて、二人の楽しくて面白そうな言葉は次々に浴びせられ、当然奈保子はいよいよ堪らない。

「やめて下さい：食べられる：食べられるなんていやだあーっ：あああう：ああっ：あひああっ：キヒイイイイッ：お願い殺さないで：死にたくない：死ぬのはいや：ひあうっ：どうして：どうしてそんな恐ろしい事を：ヒウキイイイイッ：あああ。」

そしてその言葉が途切れたのを見計らうように奈保子の唇からはいよいよ哀れな声が激しくほとばしって、そしてその声にさえも余りの恐怖、余りのおぞましさにこれから待ち構

える自分の自分の運命が信じられないような雰囲気、激しく無残に漂っていて、それさえ取り囲んで眺めているサディストたちもいよいよ喜ばせずにはおかず、もちろんこの二人の女料理人も益々面白そうだ。

「ふふふ、どうしてつてさつきも逝ったとおり奈保子さんが可愛くて若々しくてこんなに辱められていてもやっぱり可憐で、あらゆる意味で魅力的な女の子でその上に淫ら豚奴隷だからに決まっている。何しろぶ※なんだから食べてしまうのに、何の不自然さもないだろう。」

「それに大統領閣下やぼすだけではない、私たちもテレビで見て奈保子は極上の食材だと目当てをしていたんだ。」

「もちろんこれだけおいしそうな女の子だからね。我々はもちろんの事、お客様、少なくともここにこうして集まっているお客様が目だって異様だとは気づかなかったな。まあ気づかなくても普通はそんな目で人間見ないから無理はないといえば無理はない。とにかく腕によりをかけて料理してあげるから、ふふひ、ふふ、覚悟をしておく事だな。」

そして二人はいよいよ一層面白そうに言い放ってくる。

そして当然の事ながら殺されるのさえ余りある上に、まさかこんな恐ろしい人たちにその上に食べられてしまうなど、そんなおぞましい事など想像もしていなかったに違いない、余りの恐怖に奈保子の目の前は一気に暗闇に包まれそうになる。ただし全身に沁み込む液体の激痛はそれを許さない。この美麗で魅力的な食材は、なお一層無残に泣き狂いのたうち狂ってこの二人ばかりではない、集まった人の皮を被った悪魔たちもおさら激しく喜ばせずにはおかないし、料理人たちはなおさら面白そうだ。

「ふふふ、それより先に今奈保子がされている事について説明すべきだったかな。その液体の中には酢にたつぷりと塩胡椒を入れて、その上にアブドゥーラ島とか言うインド洋の島特産のリキュールもたつぷり入れて、東南アジアで取れる何とかって言う飛び切り辛い唐辛子のエキスを一々上げるのが面倒なくらい色んなハーブのエキスを加えてあるものなんだぜ。そしてこれが人間の肉からその臭みを抜いてくれるのだから、それは痛いだろうね。」

「つまりはこの漬け汁、そう漬け汁と言ってもいいだろうね、には結構金だつてかかっているから、もちろん料理されてしまう奈保子はその効果を味わうことはできないから、今の間にその肌でじっくりと味わう事だ。それについてだけでもその水中ダンスにしたって中々刺激的で、何だか料理の前に食欲を高めてくれたならば私たちもとても嬉しいがこれは言うまでもないみたいだな。」

そしてようやく話し終わる。

しかし当然奈保子は無残に苛まれている体は無数の灼熱している槍で抉り抜かれるようないよいよ残酷な激痛に苛まれる上に、処刑されるうえに食べられてしまうという言葉までも頭の中で激しく反響していて、奈保子は相変わらず水中でその体をいよいよ一層の激しさでのたうち狂わせながら、

「ギャウキヤアアアアアアッ：ヒウギヤアアアアアッ：ぎがあう：ギウギヤアアアアッ：痛いよーっ：食べられるなんて：痛いーっ：どうして：グギウキヤアアアアッ：ぎひあう：誰か助けて：いやだ：グギヒイエエーエッ：こんな事いやだあーっ。」

とさらに一層無残な声を張り上げて泣き狂い泣き叫び哀願し、さらに激しくその体をのたうち狂わせて苦悶させるから、そのいよいよ無残で刺激的な姿に取り囲んでみている変態サディストたちの劣情から嗜虐心、鬼畜な興奮から歓喜、ついでに自分自身に対する食欲

までも刺激しなければならぬ。もちろん奈保子の苦悶と絶叫はなおさら凄絶だが、この人の顔をした悪魔たちの芽や顔はなおさら熱く激しくざらついている。

「ヒグウキヤアアアアッ：ぐあうっ：ヒギイイイイッ：ひぎあっ：いやだあーっ：こんな事どうして：ウグキヤアアアアッ：ヒイイイイイッ：ヒイイイイイッ：ヒイイイイイッ：悪魔あーっ：死にたくない：食べられる：食べられるなんていやあーっ。」

三十分余りも漬け込まれていた奈保子はようやく水槽の上へと吊り上げられて、その体を激しくのたせて無残な声を張り上げ泣き狂い泣き叫んでいた。もちろんその姿は一層無残だが料理はまだ端緒に就いたばかりではない。

「さてこれから肉に味を付けやらなければなりませんから、今度は皆様にご協力いただかなければなりません。：、どうやらこれはお願いするまでもありません。」

ちびででぶがいかに面白そうに、満足そうな笑みを満面に浮かべて言うが、なるほどそれはその言葉通りでこんな鬼畜連中に否やなどある訳がない。とそこに具足蟲がいかに自分が調合したぞと言った顔の具足蟲が大量の塩に胡椒やら細かく刻んだハーブをたっぷりと混ぜ込んだものを持つてきて、と客たちは結構派手に着飾っている者も先を争うようにそれを手にするなり、なるほど散々に苛まれて全身真っ赤に腫れ上がって、至る所皮が筆り取られて肉をむき出しにしている、さらにあんなものにたっぷりと漬け込まれて一層無残な事になっている奈保子の全身に一斉に擦りこみ始めて、もちろんいきなりそんな事をされてそれが地獄でない道理がない。その体はいよいよ一層無残に激しくのたうって、

「グギャギヒイイイイイッ：ヒグウギヤアアアアッ：アギヒイイイイイッ：アギヒヤキヤアアアアッ：うおあっ：痛いーっ：ご主人様許して：許して下さい：あぐあっ：痛いーっ：グギキイエエーエッ：ああう：お客様助けてえーっ。」

といよいよ一層無残な声をひたすら張り上げて泣き狂って絶叫し哀願しなければならぬ。

しかし奈保子がこうして無残な姿をさらせばさらすだけこうして擦りこんでいる方は益々一層面白そうだし、今まで自分たちが思うが俣に責め苛み、辱め抜いた何の罪もない生贄の清純派アイドルが、今日処刑されてしまった上に自分たちに食べられてしまうのだからなおさらにそそられている。

「ふふふ、このおっぱいはいつだってもみ心地は最高なものな。しかしこいつだってもうすぐこの胸からお別れかと思うと、一際感慨深いものがあるものな。もちろんこの素敵なお尻だって最高だしな。」

「その代わりここの肉が食えるのだから、そう思ったら感慨も減ったくれもあったものじゃないだろう。」

「いやいやむしろなおさらに感慨深いものがあるというべきだろう。しかしこの貰いて喜ばせてやった処だってもうすぐ僕たちに食べられてしまう。名残惜しいのだからそそられるのだから食欲なのか劣情なのか、自分でもどっちなのか訳が分からなくなりそうだ。」

そんな事を言いながらその肌にその特別に調味された塩をさらにたっぷりとまぶしあげていって、当然の事ながらその激痛はいよいよ残酷で、さらに塩があら塩だったこともその責め苦をいよいよ一層残酷にする。奈保子はいよいよ無残な声を張り上げて、そして無残に吊るされている体をなお激しくのたうち狂わせながら、

「グアヒギヤアアアアアッ：ヒキヤアアアアッ：アグギイエエエッ：グウキヤアアアアッ：ああうっ：痛いよーっ：殺さないで：ひぐお：痛いーっ：ひぐうっ：アウキヤアアアアッ：お願い食べないで：私を：私を食べないでえーっ。」

と泣き狂いのたうち狂っている。もちろんこんな状態でそんな事をされる激痛はまるで無数の灼熱した錐で抉られるかのような凄絶さで、言うまでもなくその苦悶と絶叫はいよいよ激しい。

そしてその有様は益々一層刺激的で無残で、専ら客たちに任せているウロシンケたち、そしてネガエツタたちはそれはそれで無残な奈保子の様にその目を一際激しくぎらつかせて眺めていたが、もちろんこうして眺めているだけでは我慢できなくなってくるのが、サデイストのサデイストたる所以と言ってよい。それが一段落したタイミングで進み出たのは節子と和昭という親子だから当然とはいえやはり珍しい組み合わせだ。そしてひときわ残忍な笑みを浮かべているゾルバと、そしてさっき出番がなかったゲルバの手にはあの細かな棘を一面に植えつけた棘付きの鞭が握られている。そしてたつぷり塩胡椒した客たちが退くのに合わせて進み出て、客たちの目はさらに激しくぎらついて、一方奈保子は一層残酷な責め苦にのたうちながらも二人の姿を認めたに違いない、

「ヒグウギヤアアアアアッ：ヒギイイイイッ：ゲルバ様：ゾルバ様お願い助けて：ひぐあう：ギウキヤアアアアッ：アキヤアアアアッ：アヒイエエエッ：うあうっ：ひどい事しないで：死にたくない：うぐあっ：お願いいやあーっ。」

といよいよ一層無残に泣き狂って

十九、蟻を浴びせて手足も

二十、アイドル釜茹で

二十一、切断して料理して